San-ai

三愛会会誌　No.66　'71-1

特集：生活の発見

新しい生活の価値

――われわれの生活を再発見する――

南　　博
＜一橋大学教授＞

☆　人間の行動とは

「人間は，生まれ落ちたからには働かなければならない」という言葉が，ゲーテの『ファウスト』の中にあるが，人間にとって，働くとまでいわなくても，つねに行動すること，それは人間が生きている限り，そして目が覚めている限り，何かをしないではいられないというのが正常な状態だからである。それは活動性の欲求と呼ばれて，人間の生まれつき備わった欲求と考えられている。

その上，人間は，ほかの動物と違っていつもほかの人たちと社会的な相互行為の中にいるのだから，人間が行動するというのはまた，人間が社会行動をするという意味でもある。社会行動というのは，人間が他人に何らかのしかたで働きかけ，また逆に他人から影響されながら生きていくことである。

そこでは，動物と違って社会の定めるさまざまなルールがあり，それは法律や慣習などのように，勝手気ままなことをさせないように多少とも束縛する，社会的なコントロールの手段である。これが一つの社会に通用する価値体系というものである。

価値体系というのは，ある社会で，善悪，正邪，美醜など，物事の道徳的価値，美的価値などの，いわば番付のようなものである。そこでは，社会のメンバーがその価値体系に大体従って生活することが要求されている。そのような価値体系に沿って生きていくことを社会的な同調といっているが，同調するかしないかということは，社会のメンバーがおのおの自分できめてよい自由が，多少とも与えられている。もちろん法律は正邪の価値体系であって，それにそむけば罰が加えられるという意味では，もっとも強制力の大きなものであるが，その法律でさえ時代によって変わっていくのである。さらに慣習になれば，風俗のように時代によっても，また同じ時代でも，集団や個人によって違うものもある。

☆　価値の混乱

今日の社会は，価値体系という面から見ると，その大きな変動の時代であるといえる。敗戦は，それまで日本の社会で守られてきた価値体系を一挙に崩壊させた。戦前の価値体系では，国家の元首としての天皇に最高，絶対の価値を置き，すべての価値がそれに従属するものとされ，愛国心が個人の道徳的価値としてもっとも尊いものとされていた。しかし，敗戦は古い価値体系を崩壊させただけではなく，それ以後今日まで，新しい価値体系を確立しないままで，むしろますます分裂と混乱が続いているのである。

戦前の青年にとっては，国家にとって有用な人材になることが，個人の生活理想とされていた。しかし現在では，国家にとっての価値よりも，個

人にとって，あるいは人間にとっての価値というものが，あらためて考えられるようになった。ここに，日本の青年に限らず世界中の青年にとって，古い価値の否定と新しい価値の探究という，重大な課題が横たわっているのである。

価値の混乱ということは，いいかえると，古い価値体系のような絶対，最高の価値が失われ，価値体系が絶対価値を頂点とするピラミッド型の序列ではなくなったことを意味する。つまり，国家に対する忠誠心を絶対価値として，その下に家族的な価値としての孝行とか，友人の間での友情とか，あるいは勤勉などの価値が，固定した形で一つのまとまりのある全体をつくっていたのである。この絶対価値を頂点とする価値のピラミッドがくずれてくれば，さまざまな価値は，もはや絶対的な優位ではなく，それぞれ相対的な比重だけの問題になってくる。これを価値の相対化と呼んでいる。

今日のわれわれ日本人の心の中には，絶対価値のピラミッドではなく，さまざまな価値の相対的な結びつき，それもかなり変動し動揺している，不安定な，アンバランスな価値体系が存在することになる。

若い人たちにとって，たとえば国家への忠誠心というような絶対価値のかわりに，自己への忠実さ，経済価値の重視，友情のかわりに相互の契約的なものの考え方，親孝行のかわりに親子が互いに同等な人権を持つ人間として相対的な地位を保つといったように，人間の行動が絶対価値にすべて従属するようなやり方ではなく，一人一人がさまざまな価値を，その状況に応じて適当な比重で判断するようになっている。

☆　宗教的伝統のない日本

こうして価値の相対化が進んでくれば，人間はひとりでに，価値の相対主義からくる心理的な不安定の状態に陥いらざるを得ない。このことは，絶対価値を持っている心理的な状態とくらべてみればよくわかる。たとえば神に絶対価値を求める宗教的な伝統のある国民の間では，青年たちも，ほかの価値がたとえ相対的であっても，最終的に神への信仰という点で心理的な安定があるといえる。

数年前，イギリスの歴史学者として知られているトインビー教授が日本に来られたとき，日本の青年について話したことがある。そのときトインビー教授は日本の青年の自殺率が高いことを指摘した。それは，ヨーロッパの青年たちのような宗教的な伝統が，日本の青年には欠けているので，神という絶対価値によって救われることがないのではないかということと，日本の青年の人生の目標は何なのだろうかという疑問であった。

考えてみると，日本は宗教の伝統が世界の文明国でも，もっとも希薄であるということができる。神社やお寺の数が非常にたくさんあるということは，宗教の外面的な形態は豊富だということになるが，日本人の間に，ヨーロッパやアメリカのような宗教的精神の伝統が，国民の間に行きわたっているとはいえない。

日本の宗教は，むしろ価値の絶対化よりも，価値の相対化を進めるようにできている。神仏といって，神さまも仏さまも区別がつかないほど混合しているし，また八百万（やおよろず）の神といって，たくさんの神さまがそれぞれ相対的な役割をしている。至るところに神さまが宿っていて，絶対的な存在としての神によって統一されているわけではない。だから，日本人の信仰は現世利益といって，現実の生活にとって何か利益が与えられるように神仏にお願いすることはあっても，唯一の神に帰依する絶対的な信仰は，日本人の間に行きわたらない。

もっとも，外国でも青年たちは次第に宗教の絶対価値から離れていく傾向があり，何も日本に限ったことではないが，日本の青年の場合，トインビーの疑問は，日本の宗教の相対主義が一つの答になるかもしれない。

☆　現代青年の精神構造

このような価値の相対化は，心理的な不安定に結びつくから，若い人たちは自分たちなりに，めいめいの価値体系を，何か安定したバランスのあるものにしようとするだろう。それは意識的に自分の価値体系をつくり出そうとする場合もあるが，そのような意識の表面に出る努力ではなく，むしろどこかに絶対価値の追求者のモデルを見つけてくることになる。

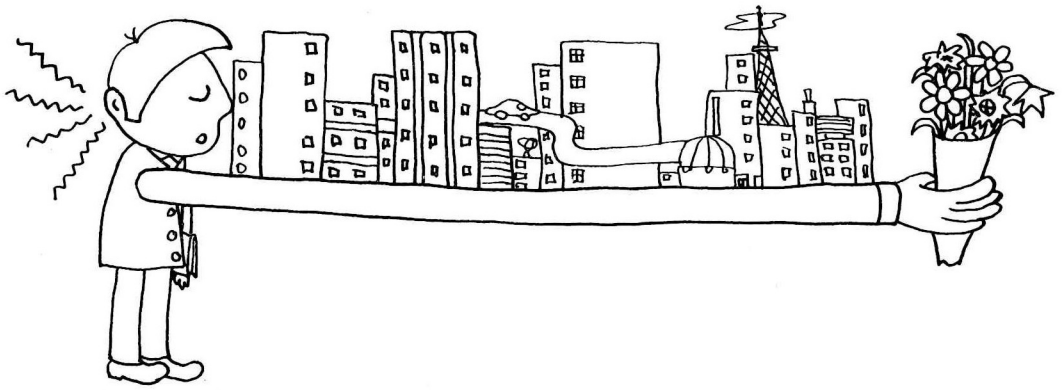
たとえば，若い人たちに喜ばれる漫画や劇画のヒーローは，そのような絶対価値の探究者である場合が多い。『銭ゲバ』は，「銭があれば何でもできるずら」という，金銭の絶対価値を追い求めていく。その行為自体が犯罪になろうが，不徳であろうが，問題はそこにあるのではなく，この価値体系の動揺，混乱，それからくる心理的な不安，不満に満ちた青年たちにとって，『銭ゲバ』は現代の英雄として歓迎されるのである。

同様なことは，暴力を絶対価値とするやくざの世界を描いた映画の流行にも反映している。そこでは，暴力だけではなく〝仁義〟という絶対価値がきびしく支配しており，それらが，社会全体から見るとき法律にそむくとか人間性を無視しているといった，常識的な価値判断をこえて，やはり一種の絶対価値を実現する世界として，そこに心理的な安定感を求めるのである。

このように，今日の価値体系の混乱は，一方で価値の相対化，他方でその相対化をチェックしようとする絶対価値の追求という，二つの方向に分裂している。一人の人間の中に，このような価値の二方向への分裂が起こっているのが，現代の青年の精神構造の一つの特徴である。

☆　何に生きがいを感じるか

では，そのような分裂に若い人たちは耐えていくことができるだろうか。あるいは，そのような分裂を何かの形で統一的な価値体系へと変えていくことのほうがのぞましいのか。言いかえると，若い人たちが自分たちの手で新しい価値体系をつくり出していくべきなのかどうか。



現実に若い人たちは，自分に聞いてみれば，はたしておのおのがどんな価値体系を持っているだろうか。案外，あまり考えないで，適当な，相対的な価値をいろいろ持ちあわせて生きている人が多いのではないだろうか。

職場にいる若い人たちの場合に，かりに絶対，最高の価値がないにしても，自分の価値体系の中で，重さの順に価値を並べてみることはできるだろう。それは一言でいうと，〝何に生きがいを感じるか〟ということできまってくる。つまり，この価値を実現するために，あるいはこの行動をするために自分は生きているし，これからも生き続けるだろう。つまりこの価値の実現ができないよ

うならば生きがいがない，というものとして何があるかということである。

〝生きがい〟とはそういうものなので，人によっては仕事に生きがいを見い出すこともある。仕事をすることが楽しみである。もし仕事を続けられなければあまり生きている意味がない，と思っている人があれば，その人にとって仕事が絶対価値に近いもの，少なくともその人の価値体系では最高の位置を占めるだろう。

人によっては，音楽が絶対価値あるいはそれに近い位置を占めることがあるだろう。音楽を聞いているときが，生きている甲斐があったと感じるときであり，音楽がもし何かの理由で聞けなくなることがあれば，もはや生きがいを感じることができなくなる。勉強も仕事も，生活のすべてが音楽にかけられている。そういう人もあるに違いない。

人間は何を自分の最高の価値にするか，それをきめることが，人間の自由というものである。自分の価値体系をみずからつくるところに人間としての存在がある。

青年は，これから新しい社会をつくるために生きているのだから，当然，古い価値体系とは違った，新しい価値体系，新しい絶対価値を，みずからの手で創造しなければならない。それは，家庭で親から教わったり，学校で先生に聞いたり，本に書いてあるということではなく，主体的に自分が決めることである。人間の主体性とは，人間が自分の価値体系を少しずつでもつくっていくことであって，そこに人間が自分という存在を創造する意味がある。

若い人たちは，しばしば生きている意味がわからなくなったという悩みを訴える。しかしその悩みは，自分の価値体系について深い関心があるからこそ生まれてくる悩みなので，その悩みを大切にしなければならない。人間が生きていくためには，いやでも自分の価値体系を自分なりに考え出さなければならない。フランスの哲学者サルトルが，「人間とは，毎日のように自分が考え出していくものである」といったのも，ここでいう主体的な価値体系の創造の問題と関わりあっている。

☆　人生に強い絶対価値

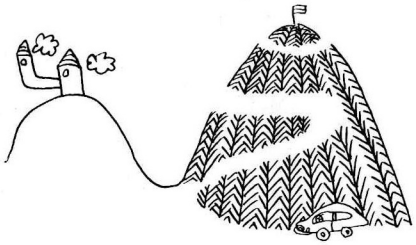
では，若い人たちは一体何を絶対価値とするのか。あるいは，価値の絶対化ということを拒否する立場に立つのか。もちろんそういう立場もあり得る。絶対価値なんか認めない。自分はその場，その場で，すべての価値を相対的に状況に応じて考えればよいと。この考えは，状況に対するその場限りの適応，受身の順応ということであり，こういう相対主義的な生き方もできないことはない。しかしそれは，人間の環境に対する適応とか順応の能力を過信していることである。あるいは，そういう意味の自信過剰ともいえる。つまり，どんな状況になっても，そのときそのときに判断をしていくということは，比較的平穏な時代や人生の危機についてはいえることだが，社会的な危機，あるいは個人の生活の大きな変動にめぐりあったとき，ふだんやっているような適当な適応ではすまされない場合がある。そのときに初めて，絶対価値，あるいはそれに近いものを持っていて価値体系が安定している人と，相対主義の人の違いが出てくるだろう。

それは，何も宗教的な信念に限らない。禅などでいう悟りは，大事に際してあわてない心境をいっているのだが，そのような宗教的な絶対価値だけしか頼りにならないというわけでもない。たとえば真実とか真理というものを絶対価値にしている研究者にとって，それは宗教的信念とは違うけれども，やはりそこに学問的良心とか学者としての信念という形で絶対価値があり，その点ではどんな危機の状態でも人間として挫折することなく生きることができる。

人によっては，美的価値を絶対的なものとする場合もある。芸術家，あるいは芸術愛好者にとっ

ては，美とするものが永遠不滅であり，美の価値を守るために生命をかけることもある。昨年，三島由紀夫氏が自殺をしたという事件が人々の関心をひいたが，それはやはり美という絶対価値の追求と完成をめざした一つの行為として見れば，それにまつわる道徳的あるいは政治的価値は一応問題にならない。

あるいは，家庭の幸福ということを絶対的価値とする人もあるだろう。女性の幸福は家庭にあるという一つの生活の信念を持って生きていくこともできる。しかし，そのような信念から出発して，現実に裏切られた人もたくさんいる。



そうしてみると，絶対価値というのは，どのようなきびしい現実に直面しても持ち続けることができるだけのものでないと絶対の名に値しないことがわかる。若い人たちは長い生涯にかけて価値体系を完成していけばいいのだから，あわてて人に聞いたり本を読んだりして，自分の絶対価値を借りもので済まそうとしてはいけない。時間をかけて，少しずつでも，絶対価値に近づくものを求めていけばいいのである。

☆ 生きがいの創造

今日，マスコミの発達は，何を価値とすべきかについてたくさんの情報をわれわれに提供してくれると同時に，また何を価値としていいか混乱させる働きもしている。70年代は情報化の時代であるといわれているが，若い人たちがこの情報化時代を生きていくためには，やはりおびただしい情報の量におぼれるのではなく，その質を問題にしなければならない。情報化社会に生きていくということは，いろいろな情報を頭につめ込むことではなく，自分の生きがい，価値体系にとって何がプラスになる情報かを見きわめ，情報を主体的に選択することである。それが情報化社会のほんとうの意味である。情報人間といわれるのは，情報の量をたくわえている人間ではなく，情報の質を主体的に選択できる人間のことである。それには自分の価値体系が確立していて，その価値体系の基準にしたがってみずから情報を選び出し，また自分も情報の自主的な送り手になることである。

70年代は，情報化だけではなく価値創造の時代でもある。敗戦後25年，価値体系が極度に混乱していた時代から，価値体系確立の時代へと向かうのである。70年代の展望というときに，情報とか技術とかという面よりも，むしろ個人の価値の創造，具体的には生きがいの創造こそが，70年代の課題である。それは社会とか政府がすることではなく，一人一人の青年が，自分の内面の問題としてだれにも動かされずに，自分でつくり出していくのである。

この意味で，70年代は，人間が外から内へ，社会から個人へ，組織から人間へと，目を向け直す時代であり，その意味で個性化の時代，自覚の時代なのである。

南　博（みなみ・ひろし）
1914年東京に生まれる
京都大学卒業，コーネル大学大学院卒業
専攻　社会心理学
現在　一橋大学教授，社会行動研究所所長
著書　「社会心理学入門」，「日本人の心理」，「体系社会心理学」，「社会心理学の性格と課題」
訳書　「デマの心理学」